〈シリーズ・先生（十七）〉

阿部好策先生との出会い

～バックボーンの形成～

青柳勇治

はじめに

この春に定年退職となり、現在は再任用で出雲崎町立出雲崎小学校に勤務している。三十六年間の教員人生は、苦しくもあり楽しくもあり充実したものであった。やっとゴールということで第二の人生を歩みたいところだが、もうしばらく働かなければならない。振り返ってみると、もともと人付き合いが苦手で、教職が自分に合っているのかと悩む日々であった。教員になろうと思ったきっかけは、単純に父が中学校の教員だったからである。と言っても父から何か教職について聞いたこともなく、教職については学園ドラマで知るくらいだった。

そのような私が何とか定年まで勤め、さらに再任用で働き続けることができたのは、何と言っても阿部先生との出会いがあったからだ。

阿部先生との出会い

二年浪人して、やっと大学に合格したこともあり、学生生活にはとても期待していた。何かやってみたいと、おもしろそうなサークルや団体に首を突っ込んだ。この頃は「教育」には全く興味がなく、興味関心の赴くまま彷徨っていた感がある。

教養課程から教育学部課程に進み、教育原理の講義を選ぶことになった。当初、別の教授の講義を希望したが、満杯で仕方なく阿部先生の講義を受けることに

なった。少人数でしまったと思ったが、講義が始まると、ぐいぐいと惹きつけられた。癖のある広島弁での自信たっぷりな話し方、教育に対する鋭い視点など、今まで接したことのない体験であった。

三年生になり、いよいよ研究室を決めるに当たって、迷わず阿部先生の教育方法学研究室を選んだ。阿部先生は研究についての指導はもちろん、ゼミ生の集団づくりにも熱心に取り組んでくださった。

研究活動では、四年生の卒論を対象とした特研と自主ゼミがあった。自主ゼミは、三、四年生合同で理論書や実践記録を読んで分析・検討を行った。吉本均著『訓育的教授の理論』『学級で教えるということ』、坂本泰造著『授業に挑む』『学級の主人公はぼくらだ』（いずれも明治図書）のゼミが学びとなった。やり方は、担当者が一定のページをレジュメにまとめ、内容についての見解・疑問を報告する。他のゼミ生は、それをもとに意見を出し合った。難しいところの解説や深めるべき点を深澤広明先生が指摘してくださった。深澤先生は、阿部先生の大学の後輩で、ゼミ生よりも六つほど年上だった。兄貴分という感じで気楽に疑問をぶつけることができた。よく夕食をご馳走になった。二人の先生から教えていただけたのも阿部研の魅力であった。

こうしたゼミは、教育理論と実践を様々な角度で学ぶことができ、学べば学ぶほど新たな疑問が湧き、時間の過ぎるのを忘れてしまう至福の時間であった。

すでに教職についた先輩の授業研究に参加する機会もあった。さらに、北陸授業研究会という先輩教職員とゼミ生のサークルもあった。サークルの「教師の教えたいものを、どう子どもの学びたいものに転化するか」というテーマが記憶に残る。研究室の活動とサークル活動と、とても忙しかったが、理論と実践についてたくさんのことを学ぶことができた。

また、民間教育研究団体の存在や研究成果についても教えていただいた。文芸研の視点論、数教協の水道方式、全生研の班・核・討議づくり、生活綴方、仮説実験授業など、様々な研究団体が当時の文部省と対峙し、あるいは影響を及ぼし戦後の教育が展開してきたことを知る機会となった。この県民教育研究所とも設立当初から関わることになった。

卒業論文は『生活綴方の今日的意義』という内容で書いた。戦後の生活綴方の復興とその後の混乱、そして八十年代の実践についてまとめた。卒論指導では、

下書きを丁寧に読んでくださり、文章の添削やさらに読むべき文献の紹介や検討すべき論点を教えていただいた。何をどうまとめてよいかわからず自分の書く力の無さ、無知を思い知らされた卒論であった。

研究室は阿部先生にとっての学級づくりの場でもあった。研究室開き、ハイキング、研究室や先生宅でのお楽しみ会などのイベントが行われた。お楽しみ会ではいろいろご馳走になったが、先生お手製の広島風お好み焼きは絶品だった。

夏休みには、徳島の阿部先生のご実家に遊びに行った。その目的は何とウナギ捕りであった。ご実家の裏の川に釣り針を仕掛けて捕るのである。手作りの仕掛けを作るところから始まる。ジンタという餌の魚も川をせき止めて捕まえる。私にとって人生初のうな丼は、自分たちで捕ったものだった。

このウナギ獲りの経験は、現場に出てから「太造じいさんとガン」の学習で役立った。太造じいさんがうなぎ釣り針を使う場面の学習で、子どもたちに自信を持って説明することができた。

こうしたイベントは、ゼミ生の仲間づくりを進め、イベントの企画・運営能力を高める意図があったと思われる。

教員人生を送る上で基礎となる理論と実践を学生時代に学ぶことができて、とても幸運であった。

教職に就いてから

阿部先生とのお付き合いは、卒業後も続いた。教育現場に出てからは、北陸授業研究会で指導していただいた。現場に出たての頃は、まだ土曜日が半日授業日であった。貴重な休みであったはずなのに日曜日に、長岡市の中央公民館に集まって学習した。サークルでは、日々の実践の悩みを交流する「悩みレポート」コーナーと授業研究などを行うメンバーの指導案検討や教材研究などコーナーがあった。同年代ばかりの歴史の浅いサークルだったので、和気あいあいで楽しい時間だった。新採用が湯沢だったので、上越線で一時間以上かけて参加したのが懐かしい。

私自身も何回か授業研の機会をいただいた。校内の授業研と違って縛りがなく、最新の研究成果をもとに授業をすることができた。阿部先生や学生、サークルのメンバーからたくさんアドバイスをしてもらい授業に臨んだ。

授業研究では、阿部先生や学生から最新の教育理論や実践の方向性が提案されたが、理解するのが難しく、自分のクラスで授業として実践するのは、さらに困難であった。

それでも、四苦八苦して授業研究を行い、学生あるいはサークルで検討してもらうとたくさんの学びがあった。一度授業研をすると以後五年以上は現場の最先端を行っているように感じられた。

おわりに

もしかしたら聞き違いや私なりの受け止めであるかもしれないが、阿部先生から教えていただいた言葉を紹介する。…以下は、私の解釈・受け止めである。

○「クラスの中で、最もしんどい子が活躍できるような視点で教材研究し授業づくりをしよう。」…授業のユニバーサルデザイン化ということが言われるが、わかる授業づくりの基本であると考える。

○「生きることと研究・実践することを統一的に追究しよう。」…しんどい子に寄り添う、いじめや差別を許さない、真理・真実を追究することを、子どもに教えるとともに教師自身もそのように生きるということが大切だ。

○「子どもたちにとって、最も切実な現代的・現実的課題に取り組む授業づくりをしよう。」…環境、生命、安全、性など、現代社会が抱えるテーマを学習する。教師自身も伴走者的立場で子どもとともに学ぶ。

○「否定的状況の中に肯定的なものを、肯定的状況の中に課題を見付けよう。」…勉強がわからなくて暴れている子の内面を、その子のわかりたいという願いやわからない自分を置いていくなという怒りの現れではないかと考えてみる。

○「真面目にやっていれば、何とかなる。」…卒業時に、先生からいただいた餞の言葉。自分なりに真面目に生きてきたら、何とか定年退職まで勤め上げることができた。

阿部先生が新潟大学を退官されてから、八年ほどになる。多くの教え子が、大学教官、小中学校の管理職、現場教員等として活躍している。まだまだお元気でいらっしゃると聞いている。機会があったら新潟にお越しいただき研究会をしたいと願っている。

（あおやぎ　ゆうじ・出雲崎小学校）